

あなたに愛や恋は求めません
3



アウグスト

ミュンター侯爵家の前当主。
一見すると好々爺だが、
ヴォルフを失脚させようと
狙っていて……

エルマ

イルーゼの親友の令嬢。
イルーゼ同様
困った家族がおり、
そのことで悩んでいる。

カサンドラ

イルーゼの兄の妻。
夫との関係は冷めているが
イルーゼとはよい関係を
築いている。

フレディ

叔父であるヴォルフを慕う青年。
後継の座を辞退するも
なぜかアウグストに
執着されていて……

イムレ

ヴォルフに対して
いやに親しげな王太子。
イルーゼのことも
気に入っている様子。

ヴォルフ

国内の貴族家をまとめる
ゾルガー侯爵家の当主。
感情がなく愛を理解しないが
妻への対応には誠意がある。

イルーゼ

賢く、現実的な元・伯爵令嬢。
ヴォルフとの契約結婚によって
ゾルガー侯爵夫人となった。

CHARACTER

朝のひんやりした空気が頬を撫でる。ゾルガー邸の東棟は当主一家が住まうために誂えられたもので、そこにある食堂も人を招いての晩餐ばんさんを行う南棟と違い、華美さよりも居心地の良さが重視されている。執務室と同じ濃緑を基調とした内装と広すぎない空間は親しみやすく穏やかな気持ちにさせてくれるわ。

婚姻式から七日目の朝、私はいつもの時間に起きていつもの時間にここに向かった。これまでの五日間、目覚めれば必ずあったヴォルフ様の姿はなく、私は久しぶりに一人で目覚めを迎えた。そのことに少し寂しさを感じるけれど、これまでが異例だったのよ。まさかヴォルフ様が五日間も一緒に過ごしてくださるなんて思わなかったもの。

食堂の扉を使用人が開け、その先に進む。既にヴォルフ様とフレディ様が着席していた。五日ぶりの食堂、変わった関係と二人の視線に気恥きぢずかしさが増した。

「お待たせしました」

「気にするな。待っていない」

顔が火照りそうになるのを誤魔化すように謝罪を口にする、ヴォルフ様が素そ気けなく答えた。

知らない人なら無下むげにされたように感じるかもしれないけれど、これはヴォルフ様なりの気遣いだと知っている。言葉通り、自分も来て間がないから気にするなという意味だから。

「フレディ様もありがとうございました」

「あ、ああ」

五日間、ヴォルフ様の仕事を彼に押し付けてしまったことへの謝罪だけど、その理由のせいかわレディ様の歯切れも表情も渋かった。益々恥はずかしいわ、何をしていたか周りはわかっているだけに居た堪たれない……それでも食事は美味しくしてしっかり食べてしまった。ずっと体形が変わらないよう食事を制限していた反動かしら。いえ、これからはヴォルフ様に裸を見られるのだから一層気が抜けないわ。

多分この屋敷に移ってから一番気まずい朝食を終え、その後は執務室へと案内された。いつもの服装で机に向かうヴォルフ様の前には書類の束が置かれている。休んでいる間に溜まったお仕事ね。何かお手伝い出来ることはないかしら？ いえ、私に出来ることはフレディ様がやっているでしょうけれど。

「ヴォルフ様、私にお手伝い出来ることはありませんか？」

声をかけるとヴォルフ様がなんの感情も感じない瞳を向けてきた。この瞳を私室や寝室で間近に見たことを思い出して鼓動が速まる。朝から何を考えているのよ、私。邪念を振り払うように顔に力を入れた。緩んだ顔を見られたくないもの。

「そうだな……」

そう呟いたヴォルフ様が見た後で書類に目を落とした。数枚を捲^{めく}って少し考えた後、手元にあった書類の束を掴んで私に差し出した。

「やってみる」

「え？」

「旦那様？」

思わずティオと共に声を上げてしまったわ。これらって……当主の裁可が必要なものではないの？

「旦那様、いくらなんでも……」

「構わん。お前は正式に俺の妻になった。この先俺の代わりを務めることになるかもしれん。やってみる」

やってみるって……そんなに簡単なことじゃないと思うけれど。思わずティオと顔を見合わせてしまったわ。

「これらの中から出来そうだと思うものを一つでいい、やってみる。急ぎのものはない。気負わなくていい」

そんな風に言われたら出来ないなんて答えられないわ。なんでもいいからお役に立ちたいもの。一応当主教育の一部なりと習ったし、婚約者になってからはフレディ様と一緒に色々学んだから。

「ありがとうございます」

任されるのは緊張感もあるけれど、認めてもらえたと、信頼してもらえたと感じられて嬉しくな

る。今は無理でもいつかヴォルフ様の負担を共に背負えたら、それは素敵なことだと思うから。

「奥様……」

「ティオ、わからないことがあったら教えてね。間違っていると感じた時もよ」

ティオはまだ何か言いたそうにしていたけれど、かしこまりましたと小さく頭を下げた。ソファにかけて書類の束に目を通す。向かい側の部屋ではフレディ様やアベルたちが仕事をしている。わからないことがあれば彼らに聞けばいいわよね。

ヴォルフ様は王宮からの呼び出しを受けていて、程なくしてアベルが呼びに来て着替えに向かわれた。暫^{しばらく}して戻ってきたヴォルフ様は正装に身を包み、逞^{たくま}しさと凛^{りん}々^々しい優美さが増していた。今なら夫人たちが騒ぐのもわかるわ。あの方たちは聞^{きこ}のことも含めて言っていたのね。逞^{たくま}しくて男性らしいという点では今流行^{はや}りの優美なだけの男性など目じゃないもの。何度見ても惚^ほれ惚^ほれしてしまう。少しでもそのお姿を見ていたくて見送りに出た。

「行ってくる。何かあったらティオかフレディを頼れ」

「はい。行つてらっしゃいませ」

離れ際に軽く頬を撫でられてびっくりした。そんなことをする方だなんて思っていなかったから。呆然としている間にヴォルフ様は行ってしまったわ。

「……びっくりしたわ……」

「はい、私もです」

同じように感じたのならティオにも想定外だったのよね。少しは私を特別だと思ってくださって

いるのかしら？ 自室に戻ろうとしたらヴォルフ様の居間に昼食を用意したと言われてしまった。

「ティオ、ヴォルフ様がいらないのいいのかしら？ 一人の時は私の部屋でいいのだけど……」

「旦那様がそのようにと。留守の時も奥様には好きなようにと言付かっております」

「ティオ、奥様って……」

そういえば婚姻式の日から奥様と呼ばれていたわ。ヴォルフ様が一緒だったからなんとなく聞き辛かったのだけど。

「旦那様がそうお呼びするのにと。お名前呼びでは他人行儀で、妻と認めていないのではと疑念を持つ者が出てくるかもしれないと、旦那様が仰いましたので」

「そ、そう」

確かにヴォルフ様は旦那様と呼ばれているのだから、奥様と呼ぶのが正しいわよね。なんだか面映ゆいわ。呼ばれるたびに背中がくすぐったく感じてしまいそう。

食後は執務室に戻って書類と睨み合った。その中から一つ、私にも出来そうに感じたものを選んだ。領地から上げられた陳情で、孤児院に嫌がらせをする者がいて子どもたちが危険だという。孤児院への慰問は貴族女性の社会奉仕として好まれるけれど、その経営は領主の寄付で成り立っているところが多い。ガウス領では父が意外にも熱心でよく慰問に行かされたわ。姉が嫌がるから私の仕事だったのよね。

陳情書を読みながら対策を考えているとお茶の時間だと声をかけられた。気になることがあったので、気分を変えたいと言って自室でお茶をいただいた。ティオに下がってもらってスージーを呼

んだから、今ここにはスージーとロッテ、マルガシかない。

「ねえ、スージー。聞はあれでよかったのかしら？」

スージーを近くに呼んで小声で尋ねた。さすがにティオや未婚のロッテたちには聞けないもの。この前ヴォルフ様は満足していたと教えてくれたスージーだから、気を利かせて他にも聞いてくれるかもしれない。ヴォルフ様に尋ねても多分問題ないとか仰らないだろうから。

「奥様、何も心配なさることはありませんわ。それよりもお身体は大丈夫ですか？」

「身体？」

「ええ、旦那様はお身体が大きく体力もおあります。奥様に無理をかけていないかと、そちらが心配でしたが……」

そ、それって……頬が熱を帯びるのを感じた。確かにヴォルフ様は身体も大きくて筋肉も凄かったし、その……色々大変だったけれど……

「だっ、大丈夫だったわよ。あまり痛みもなかったし……」

もちろん痛かったのは痛かったけれど、二度としたくないと思うほどじゃなかったわ。不安になる話は山のように聞いたものの、辛くはなかった。

「ようございましたわ。旦那様は無体なことをなさる方ではございませんが、その……はつきり申し上げないと伝わらないことも多いですから」

「……ありがとうスージー。でも今のところ大丈夫よ。嫌だと思ふことは何もなかったわ」

そう言うときスージーの表情が緩んで皺が深くなった。心配してくれていたのね、嬉しいわ。実の

母ですら心配してくれなかったから余計にそう感じるのかもしれない。婚姻式の前もその後も、母からは手紙一つ届かなかったもの。

「話は変わるけれど、今日から夫人として何をしたらいいのかしら？」

ヴォルフ様も朝から執務室に籠^{こも}られていたし、今は登城されている。いつもの生活に戻られたのだから、私も夫人業をやるべきよね。でも、何から手を付けたらいいのかしら？ 既に任されてきたものは続ければいいのよね。

スージーに助言を貰いながら今まで任されていた仕事を片付け、その後でいくつか新しい仕事を教えてもらった。今やっている仕事は簡単なものだから、それらは追々侍女に任せて、より責任の大きいものに切り替えていくことになるわね。

「奥様の補佐にはザーラかマルガを。旦那様はそうお考えです」

「そうね、二人とも優秀だし、身の回りの世話はロツテがしてくれるものね」

「はい、ですがロツテに全てを任せては負担も大きいでしょう。いずれ二人ほど奥様付きの侍女を増やすことも考えております」

そうね、これからは聞^{きこ}もあるから夜に手を借りることも増えるわね。

「わかったわ、誰かよさそうな人を見繕^{みず}つてくれる？」

「かしこまりました」

さすがに聞^{きこ}の片づけをロツテにしてもらうのは気が引けるわ。未経験だから勝手がわからないかもしれないし。

ヴォルフ様が戻られるとの連絡があったのは日が傾き始めた頃だった。思ったよりも時間がかかったわね。何か問題でもあったのかしら？ 出迎えるために玄関ホールに向かった。階段の中ほどまでくると、使用人が開けた扉からブレンとアベルを従えて入ってくるヴォルフ様が見えた。

「お帰りなさいまし」

そういえばこんな風に出迎えたのは婚姻してからは初めてね。なんだか結婚したって感じがする。

「イルーゼ、変わりはなかったか？」

「はい、特には」

「そうか」

何かしら？ 何か問題でもあった？

「王宮ではどんなお話を？」

「部屋で話す」

廊下じゃ話せない内容なのね。深刻なことではなければいいのだけど。それにしても正装のヴォルフ様に目を奪われる。あまり外に出られないから見る機会が少ないのが残念だわ。優雅な貴族服で優美さが増しているのに、背が高くて肩幅もあるから雄々しさも健在で本当に素敵。今までは優美さばかりが持て囃^はされていたけれど、ヴォルフ様のような男性らしい方の方が私は好きだわ。

ヴォルフ様が着替えに向かわれたので執務室で待つことにした。ティオが淹^いれてくれたお茶を飲みながら朝の陳情書を読み返す。

そうしている間にヴォルフ様が執務室に姿を現した。いつもの衣装に着替えたけれど髪は整えた

ままね。すっかりしていつもと違った感じが素敵だわ。そんなことをぼんやり考えていた私に投げかけられたのは衝撃的な言葉だった。

「リシエルが死んだらしい」



「リシエルが、死んだかもしれない……」

婚姻式を終え、ティオらの助言に従って休暇を過ごした。そんな中、王太子の名で休暇明けに登城するようにとの書状が届いた。手紙では済ませられない用件なのだろうと王宮を訪ねる。案内された王太子の私室のいつものソファに座ると、開口一番にそう告げられた。

「どういうことだ？」

あの女は王領の屋敷に幽閉されていたはずだ。毒杯を賜る予定だったが王太后が先に死んだため、王族が立て続けに亡くなると余計な疑念を生むかもしれないと延期になっていた。しかし……何故断定ではない？ 厳しい監視下に置かれていたのではなかったか？

「火が出たんだ。屋敷はほぼ全焼。それで近くの屋敷に移動したんだけど、その最中に賊に襲われたんだ」

「賊だと？」

「うん。盗賊だろうって報告書に書いてあった。警護は付いていたんだけど……」

王女の監視を任されていた管理者からの報告はこうだった。王女が幽閉されている屋敷の厨房で火が上がり、風が強かったせいもあり屋敷は焼け落ちたという。そこで今は空き家になっている近くの屋敷に避難することになったが移動中、破落戸ごろつきと思われる男たちに襲われた。王女の馬車を奪おうとしたため、御者を務めていた騎士がそれを察して振り切るように馬車を急がせた。だが制御を失って川に落ちたという。

「前日から雨だったらしい。道はぬかるんでいたし川も増水していた。馬車にはリシエルと女騎士と侍女が一人ずつ、御者を務めた騎士が二人乗っていたそうだ。騎士二人は自力で岸に泳ぎ着いたけれど、あとは……」

「見つからないのか？」

「……女の騎士は少し下ったところで遺体になって見つかったそうだ。でも……」

俯いて紫の瞳を伏せた。悲しみを感じているのか。罪人でも実の妹相手ならそう感じるものか。増水した川に、しかも馬車ごと落ちたら助からないだろう。服が重くて泳ぐこともままならない。ドレスなら尚更だ。

「いつの話だ？」

「火事があったのは十日前、知らせが届いたのは婚姻式の晩だよ」

王女が幽閉されている屋敷は王都から馬車で三日、早馬でも二日はかかるだろう。

「何故すぐに知らせなかった？」

「何言ってるの？ 初夜だろ？ そんな晴れの日にこんな話持っていけないよ！」

そこまで気にする必要はないだろう。せめて事情を書いた手紙を……いや、こんなことを手紙にしては送れないか。落としたら大事だ。

「その日は賊が忍び込んで初夜は延期になっていた」

「はあっ!? 賊!? しかも延期!」

「俺を狙った暗殺者が入り込んだ。夫婦の寝室にだ。とてもそんなことをしてられる状態ではなかった」

忍び込んできた男は闇ギルドに出されていた俺の暗殺依頼を受けていた。尋問したところ、俺を殺した報奨金で病にかかった仲間の薬を買いたかったと告白した。平民には命を懸けても手に入れるのが難しい薬でも、俺にとっては造作もない。裏社会の住人らしく失敗したら死ぬと理解していたから懐柔は簡単だった。薬を餌に依頼人を突き止めるように命じた。

「イルーゼちゃんは……」

「無事だ」

「そっか。よかった……」

あからさまにホッとしているが、何故そこまで心配する? 確かに侵入を許したのは失態だった。イルーゼの周りは侍女や護衛騎士がいたし、ヴィムは屋敷に侵入した時から見張っていた。動きが遅れたのはあの寝室の屋根裏は忍び込めないようになっていたからだ。

「君の方が強かった?」

「そうだな。気配の消し方も毒の使い方も知らなかった」

「そっか……」

手練れほど俺の屋敷に侵入しようと思わないだろう。俺もヴィムも裏社会では有名だし、これまでも数え切れないほど返り討ちになっている。そんな依頼を受ける馬鹿はいない。

依頼を受けるのは切羽詰まっ後がない者たち。闇ギルドの依頼は失敗しても報酬が手に入らないだけだから飛びつく者も多い。一方で依頼主から直接受けた場合、失敗すれば自分が殺されるし、依頼主も裏切られないよう家族や仲間を人質に取るから必死になる。そういう相手だと防ぐのは難しい。

「式の直前に起きているのが気になるな」

「暗殺者が入り込んだのと関係しているって?」

「王女の件も暗殺者の件も、俺の婚姻式の邪魔になるという点では同じだ」

「そりゃ、まあ、確かに……」

だからといって関係しているかはわからないが。犯人が同じ人物であってほしいと思わなくもないが、下手な先入観は大事な何かを見落とす原因になる。闇ギルドはあの男に探らせている。問題は王女だ。

「失火だったのか? 屋敷の移動を言い出したのは誰だ? 何故あの屋敷に決めた? 移動を指揮したのは誰だ?」

「おいおい、一度に言われても困るよ。そこは今騎士が調査しているよ」

「半月以内に結果をまとめて俺に寄せよ」

「半月い!？」

「それでも遅いくらいだ」

「……わかったよ」

こちらからも人を送るか。王家の調査は悪くはないが信用ならない。

その時、扉を叩く音がして侍従が入ってきた。

「殿下、準備が整いました」

「そっか、ありがと」

「なんだ？」

「ああ、昼食を一緒にと考えてね。たまにはいいだろう？」

珍しいこともある。こいつがそう言い出す時は何かある時だ。だが無下に断るわけにもいかない。仕方がない、付き合うか。

王太子と共に侍従の後をついていくと、そこは王たちが私的に使う部屋だった。二人だけではなかったのか？ 嫌な予感があるが今更帰るとも言えない。諦めて後に続くと、室内には王と王妃、ブレッケルが既に座っていた。王太子妃は不在か。

「君の婚姻を祝いたくてね。まあ、リシエルのこともあるからあれなんだけど……」

王太子が囁いた。昼食を共になど珍しいことを言い出したなど思ったがそういう理由か。私的なものらしく、王と王妃が正面に座り、俺の右には王太子が、左にはブレッケルが座った。

「両陛下及びブレッケル公爵閣下、御尊顔を拝し奉り恐悦至極に存じます」

一礼してから席に着いた。私的なものとはいえ相手は王族、線引きは欠かせない。

「侯爵、そんなにかしこまらずに。今日は私的なものだからな」

王が鷹揚に答えた。だが護衛も給仕する侍従もいる。王太子にするように接するわけにはいかない。

「ありがとう存じます」

「相変わらず他人行儀だな」

「臣として弁えているだけです」

慣れ合っているわけではない、それが王家と五侯爵家の約束だ。

「……そうだったな。ああ、遅くなったが婚姻おめでとう。新婚生活はどうだ？」

「とても美しい花嫁だったそうね。素敵な式だったと伺っているわ」

「ありがとう存じます。滞りなく」

色々あったがどれも些末なことだ。王太子には話したがそれ以外の者は知らなくていい。

「そうか。我が国の貴族を取りまとめる筆頭侯爵家当主の慶事だ。実にめでたい。次の王家の夜会では皆の前で祝福せねばな」

「ふふ、そうですわね」

王も王妃も機嫌がいいな。そんなに嬉しいのか？ 王女が死んだかもしれないのに。

「夫人になったのはガウス家の令嬢だったな」

「はい」

「確か……卒業式の夜会で、一人で登場された方よね」

「そうですよ、母上」

すかさず王太子が相槌を打つ。

「一人で登場する方が少なかったから覚えているわ。凛としていて印象深い方だったわ」

「ああ、わしも覚えている。中々に美人だったな。今風ではないが大人っぽくて意志が強そうに見えた。侯爵とは似合いだと思う」

何を考えているかは知らんが、貶す意図がないのなら良しとするか。

「そう言っていたけると妻も喜ぶでしょう」

「ほお、侯爵がそんな風に言うとはな」

「だから言っているでしょう、父上。何も問題はないと」

王太子が取り成すように言ったがどういう意味だ？ 何も問題はない。今更構うな。面倒なだけだ。

「そんなに警戒するな。夫人をどうこうするつもりはない」

苦笑しながら王がそう言うが、だったらなんだ？ 婚約の話を持っていった時は何も言わなかったのに、何故今になって話題にする？

「侯爵、そう警戒なさらずに。父上も母上も心配しているだけです」

ブレッケルがにこにこしながら口を挟み、王太子が反対側からそうだよと続ける。心配か、思い当たる懸念は全て潰してある。

「当家のことはご心配なく。そのお心遣いは身内に向けていただきたく」

俺のことよりもあの王女をなんとかしろ。生死がわからないのが一番面倒だ。期限のない警戒はどれほど気を引き締めていてもいつかは緩む。相手はその時を待つだけでいい。

「リシエルの件では迷惑をかけた」

あつさりと王が謝ってきた。既に侍従や護衛は部屋から出て、今ここには俺たち五人だけになっている。このために呼んだのか。

「私からも謝罪を。あの子に自分を重ねて好きにさせてしまったわ。そのせいであなたと夫人に迷惑をかけました」

王妃まで頭を下げたので気にしないよう伝える。別に国王夫妻のせいではないだろう。王女を増長させたのは王太后だ。帰国すると決まった際、王妃は政争の種になる前にどこかに嫁がせるか修道院に入れるべきだと言っていたと聞く。

「いや、わしが甘かったのだ。泣きながら一年でいいから自由にさせてほしいと言われて縛られてしまった。すまなかった」

あの王女を甘やかしたのは王だったか。為政者のくせに甘いことを。お陰で廃嫡された嫡男夫婦が何組出たことか。もつとも、王女が弁えていれば起きなかった事態だ。王だけを責められない。

「まずは搜索を。遺体がなければ弔うことも出来ぬかと」

こいつらにとっては実子であり姉妹だ。それに遺体が見つかれば俺の懸念も減る。生死不明のまま生きているのが一番厄介だ。以前なら俺一人が警戒すればよかったが今はそうもいかない。守ら

ねばならない者が増えれば負担も大きくなる。それが行動力のある者なら尚更だ。

「勿論だ。あれの搜索を優先するように命じてある。一月経つても見つからなければ死んだと公表する。後で現れても他人の空似だ」

「かしこまりました」

つまり王が死んだと公表した後で現れても偽物だと、どうしようと責任を問わないということだ。それならいい。王としては苦渋の決断だろうが己の甘さが招いたことだ。それに王女は越えてはならない一線を越えた。何度も忠告したと王太子は言っていた。王の意向に沿えない者に王族を名乗る資格はない。

食事を終わると、国王夫妻は次の公務があるといって出ていき、再び王太子の部屋に連れていかれた。何故かブレッケルと一緒に付いてきている。侍従は茶を淹れると部屋を出ていった。

「同席するとは聞いていなかったぞ」

知っていればさつさと帰ったものを。今さら慣れ合う気はない。

「悪かったって、そう睨むなよ」

「睨んでなどいない」

「……悪かったよ。でもああでもしなきゃ、君、父上と母上に会おうとしないだろうか？」

用がないのに会う必要はないだろう。必要な時は謁見を申し入れている。

「だったらイルーゼも呼べばよかっただろう」

「勿論近いうちにイルーゼちゃんも呼んで晩餐会を開く予定だよ。四十数年ぶりに筆頭侯爵夫人が

ばんさんかい

誕生したんだから」

「だったらその時でいいだろう」

「そうなんだけど、父上も母上も君に直接お祝いを言いたかったんだよ」

なんだ、それは？ その時に言えば済むだろうに。

「妃はどうした？」

「ああ、下の王子が熱を出してね」

妃が来ないと踏んで声をかけたか。下の王子はよく熱を出すし、そんな時、妃が子から離れないのはいつものことだ。それにしても何故ブレッケルがいる？

「あ、エーリックが気になった？ 君にお礼を言いたいと言ってね」

「礼？」

「はい。ロミルダ嬢の件です。婚約の白紙撤回を提案してくださってありがとうございました」

兄よりも青みの強い紫眼を真っ直ぐに向けてきた。何かと思ったらそんなことか。

「別にお前のためではない」

「それでもです。私はロミルダ嬢との婚約が嫌で仕方なかったんです。父上に言っても話が進まなくて……侯爵が進言してくださったお陰で父上がやっと動いてくれたんですよ。一生の恩人です」

「気にするな。こちらにも利があつてのことだ」

一生の恩人だなどと大袈裟おおげさだろう。そんなことを言うと思に着せてこき使うぞ。そもそもあれはミューンターの爺を揺さぶるためにやったことだ。しかし……

「あの娘に何をした？」

「何を、とは？」

笑顔を崩さずにいるところを見ると隠す気はないらしい。

「自白剤でも飲ませたか？」

「よくわかりましたね」

「エーリック、お前、そんなことやったのか!？」

王太子が慌ててブレッケルに詰め寄ったが、言われた方は平気な顔をしている。

「大切な結婚式で騒ぎを起こしたことは謝ります。ですが……提案してくださいましたのならこのくらいは大目に見ていただけるかと思ひまして」

笑顔で答える様子からして全く悪いと思っていないな。厚かましいとは感じるが、こいつはフレディと仲がいい。それにミュンターの爺を追いつめる材料が増えたのは事実だ。

「エーリック、お前なあ……侯爵は結婚式がどうなろうと気にしないだろうが、結婚というのは相手がいるんだぞ？ 花嫁に申し訳ないだろうが」

王太子が盛大にため息をついて弟を窘めた。

「そこは申し訳なく思っています。夫人には何かお詫びさせていただきます」

「好きにしろ。だが次はないぞ」

あの暗殺者に比べれば大したことではないがイルーゼは気にしているかもしれない。こいつには釘を刺しておくべきか。また面倒を起こされても厄介だ。あれに余計な苦勞をかけるのはわかり

切っている。予想される憂いは出来るだけ遠ざけておくべきだ。

「わかりました。近いうちにお詫びの品をお贈りします。伺っても？」

「構わんが先触れはしろよ」

来るのは構わないがフレディと同じ感覚では困る。

「もちろんです。ありがとうございます」

「いいなあ、俺も行きたい……」

「兄上は仕方ありませんよ。私とは立場が違いますから」

「はあ、なんだよ、二人とも。羨ましい……」

盛大にため息をついたが仕方がないだろう。誰かが王位に就かなければならないんだ。

「兄上よりも侯爵の方が王に向いていたかもしれないですね」

「そうだよね！ そう思うだろう！」

王太子が目を輝かせた。何を言っているんだ。黒髪緑目の王など誰も歓迎しないだろうが。

「そんな窮屈な立場は御免だ」

「そんなあ……」

「侯爵、考える余地もなしですか。兄上、諦めてください。いいじゃないですか、侯爵がいてくださるから兄上の治世は安泰ですよ。逆に侯爵の仕事、兄上に出来るんですか？」

「暗殺者が忍んでくる生活だ。退屈はしないだろう」

王太子とブレッケルが黙り込んだ。なんだ？

「どうした？」

「いや……君が冗談を言うなんて思わなくて……」

「ええ、私も驚きました……」

事実を言っただけで冗談を言ったつもりはないのだが。さつきも賊が忍び込んだと言っただろう。どうしてそうなる？

「ふふ、君が少しでも変わってくれたなら嬉しいよ」

「そうですね、父上も母上も喜びますよ」

二人して嬉しそうだかどういいう意味だ？ 話が見えん。が、問い詰める価値はないように思える。この二人なら尚更だ。

「はあ、あとは姉上かあ……生きているのなら早く出てきてほしいよ」

「……そうだな。可能性は低そうだけど……」

王女の行方不明は国王夫妻の表情にも影を落としていた。いずれ死ぬと決まっていたとはいえない終わりは望んでいなかっただろう。遺体が見つからないのでは諦めも付かん。厄介だ。

その後ブレッケルが帰るといいうので共に帰ろうとしたが王太子に呼び止められた。まだあるのか？ ちょよいい、聞いておきたいことがある。

「ナディア王女と親しかった者でまだ生きている者はいるか？」

「え？ 祖父の妹だろ？ どうかなあ……亡くなって随分経つし」

世代的には祖父の代、しかも義母が死んだのは異母兄が駆け落ちして俺が家に戻った後だ。あれ

から二十年近くが経った。生きていれば六十も半ば^{なか}、同年代は五侯爵家ではミューターの爺くらいしかない。

「使用人でもいい」

「君、何考えているの？」

「お前が言っただろう、兄はあの爺の子ではないかと」

「え？ あれ本気にしちゃったの？」

お前が言い出したんだろうが。こいつにしてはいい着眼点だったと思ったんだが。

「あの女に仕えていた侍女がまだ屋敷に残っていた。話を聞いたら随分親密だったと答えた。父よりもずっとだ」

それだけで通じていたとは言えないが、あの二人は時折、内々の話があるからと侍女を遠ざけていたという。それは婚姻直後から始まり、義母が死ぬまで続いた。

「……大叔母上は、ミューターに降嫁する話もあった気がする。わかったよ、調べさせる」

「王女と合わせて報告書を送れ」

「……俺だって暇じゃないんだけど？」

「こうして無駄話をしているくらいには暇だろう」

無駄話だなんて酷いと言っているが、今日聞いた話とはつくに把握済みだ。俺には収穫がないなら無駄話だろう。

「はあ、イルーゼちゃんも大変だなあ。こんな男が夫だなんて……」

どうしてそんな話になる？

「特に不満など言っていない」

「今はね。でもいづれそう思うようになるよ」

そうならないように気を付けているがこれでは足りないか？ ティオやスージーは問題ないと言っていた。イルーゼからも不満はないと聞いているが。

「フィリーネはどうしているの？」

「変わりなく過ごしている」

「クラウスからの接触は？」

「今のところない。噂を流してあまり日が経っていない。向こうも慎重になるだろう」

それらしい人物が近づいたとの話はない。あの屋敷の周りは我が家の使用人が住んでいて、怪しい動きがあればすぐにわかるようになっていいる。

「ねえ君、イルーゼちゃんを囷おぼりにしようとか、そんなこと考えていないよね？」

暫く黙っていると思ったら急にしかめっ面で尋ねてきた。囷おぼりか……考えたがあれだけ行動力があると予測が難しくして使い難い。それに……

「そんなことはしない。俺の子がいるかもしれないんだ」

そう言ったら目を大きくして見上げてきた。

「なんだ？」

「いや、君が妻や子を氣遣うようなことを言うとは思わなくて……」

「母や兄たちのことを思えばいくら警戒しても足りることはないだろう」

「……確かに」

立て続けに殺された兄たちと兄を庇って死んだ母。フレディが後継を辞退した今、また同じことが起きる可能性は否めない。王太子がソファに身を預けて大きく息を吐くのが見えたが、こうして見るとイルーゼの方が動じていない気がする。いや、こいつの場合は何をしても大袈裟おおげさなんだが。

「イルーゼちゃんに同情するよ……こんな男の嫁になったせいでもない苦勞くろうをする羽目になって……」

「妻にしると言ってきたのは向こうだ」

「それでも、初夜に賊が侵入することまでは織り込んでなかっただろう？」

そうかもしれないが最初に危険だと伝えてある。辞退する機会は何度もあったが迷っている風はなかったぞ。

「で、イルーゼちゃんとは仲良くやっているの？」

「ああ」

「ああって……ちゃんと会話した？ 聞きも無理強むりじいしなかっただろうね？」

「話わもしたし無理強むりじいもしていない」

これまででないほどに話をしたし、聞きも痛みを感じないように時間をかけた。不満は聞いていないし、ティオやスージーからも苦言はない。大丈夫なはずだ。

「それならいいけど……あんまりがつつくなよ。君の体力に付き合える女性なんかいないに等しい

んだから」

「わかつている」

「本当にわかつているのかなあ。君、仕事ばかりしているようにしか見えないけど、ちゃんと発散してたの？」

「余計なお世話だ」

「君だから心配なんだよお……」

知ったばかりの餓鬼^{がき}でもあるまいに。少なくともお前よりは発散していたぞ。

「馬鹿な話を続けるなら帰る」

「そんなこと言わないで！」

「用があるのか？　ないなら帰る。俺も暇ではない」

明確な答えがなかったからさっさと奴を置いて部屋を出た。後ろで何か言っていたが相手をしていない暇はない。この数日の間に仕事が溜まっている。フレディではまだ全てを任せるのは難しい。守るために手配せねばならないことも山のようにある。

屋敷に戻るとティオとイルーゼが出迎えた。イルーゼに王女の生死が不明になっていることを話さねばならんが、ここでは言えん。着替えが終わったら話をすると告げて別れた。途端、ティオに呼び止められた。手には一通の手紙がある。

「ハッセ子爵家の若夫人からフレディ様にお手紙が来ております。いかがいたしましたでしょうか？」

「ハッセ？」

意外な名前が出てきたな。フレディが懸想^{けそう}していた娘か。確か婿を迎えて領地にいるはずだが。そう言えば、クラウスから麻薬を買っていた客のリストに婿の名があった。泣きついてきたか。

「俺から話す。フレディを呼んでくれ」

着替えをしながら命じるとティオが部屋を出ていった。着替えが終わった頃にフレディが現れた。叔父上、お戻りでしたか？　何か？」

「ハッセから手紙が届いている」

「……アイシヤから？　今更なんの用で……」

フレディが訝^{いぶ}しげに手紙を受け取って読み始めた。俺が先に目を通してよかったがフレディのことは信用している。その姿勢は崩したくない。

「……話になりませんね」

そう言って手紙を渡してきたので目を通した。案の定、夫が麻薬の件で捕縛されたので助けてほしいというものだった。

「どうする？」

「何も。手を貸すつもりはありません。今更です」

「今更か」

「はい」

吹っ切れたのか？　その表情に迷いはないように見える。だが、醜聞^{しゅうぶん}になるほどに想った相手だ

ろう。本当にいいのか？

「放っておけば爵位返上、あの一家は平民になるかもしれんぞ」

「それでもです。こんな時だけ助けてほしいと言われても困ります。俺から断りの手紙を書きます。ティオ、今後は手紙を受け取らなくていい」

「かしこまりました」

吹っ切ったらしいな。本人がいいのならそれでいい。いつまでも守り続けていては成長出来ん。

「返事を書きます。叔父上、中を確認してから送ってください」

「見せる必要はない」

「……ありがとうございます。ですがけじめとして確認してほしいのです」

「わかった」

頭を下げたフレディは、再度お願いしますと笑みを浮かべながら出ていった。

「変わったか？」

以前は俺の顔色を窺うような自信のなさそうな目をしていた。最近は俯くことも減って顔色もいい。小さい頃から成長を見守ってきたが随分明るくなったように見える。

「左様でございますね。もしかすると奥様の影響かもしれません」

「イルーゼの？」

「はい。奥様と接する機会が増えて色々と考えを改められることがおありだったようです。貴族として情よりも責務を優先すべきとの考えに感化された様子です」

「そうか」

あれが隣にいればフレディは当主としてやっていくたかもしれない。その可能性を考えてもよかったな。その場合、確実に尻に敷かれただろうが。

「ティオ、イルーゼから不満は出ていないか」

「いいえ、特には。どうかされましたか？」

「いや……何かあつたら教えてくれ」

頷くティオを横目で見ながらイルーゼの元に向かった。



ヴォルフ様が王宮からお戻りになった後、衝撃的な話を伺ったわ。あのリシエル様が生死不明になったと。幽閉されている屋敷が火事になり、別の屋敷に移動する間に賊に襲われて馬車ごと川に落ちたらしい。共にいた女性騎士が遺体で見つかり、リシエル様と侍女はまだ所在が知れず捜索中だという。

「移動した頃は既に日が暮れ始めていた。もし身代わりを立てていても気付かなかっただろう」

夕方ならその可能性も否定出来ないわね。誰かがリシエル様を助け出そうとしたってことかしら？ 驚きはしたけれどそうであっても不思議じゃない。クラウド様が手を貸したのかしら？ それともリシエル様の取り巻きの方々？ 彼らは毒虫を使って私を害しようとしたことが発覚して今

は不遇の身だと聞いているわ。処分を不満に思い、リシエル様を救い出そうと動いても不思議じゃないわね。

「警備は強化したが警戒は怠るな」
「わかりました」

この前の暗殺者のような例もあるわ。気を抜かないように気を付けないと。誰も傷ついてほしくない。ザーラの二の舞は避けたいわ。

そのザーラだけど、ようやく医師から仕事に戻ってもいいとお墨付きが出た。傷も目立たなくなったと聞いてホッとしたわ。彼女だって未婚の令嬢だもの。男性に興味がないと言っていたけれど、いいご縁があつたら幸せになつてほしい。この屋敷にはブレンやアベルのように貴族籍を持ち、有能で独身の男性が何人もいるわ。ティオの話では職場で縁を繋いだ人も少なくないという。

「お前の兄から手紙が来ていた。一度話がしたいそうだ」

「それは事業の件で？」

「だろうな」

ヴォルフ様が自力で立つ覚悟があるなら訪ねてくるようにと兄に言っていたけれど、その氣になつたのかしら。お義姉様が上手く転がしてくれたのならいいけれど。

兄がお義姉様と共に訪ねてきたのはそれから三日後だった。二人を迎えたのは私たちが暮らす東棟ではなく客人を持て成すための南棟の応接室。妻の実兄だから東棟に迎えるかと思つたけれど、

ヴォルフ様は兄を信用していないのね。でも仕方ないわ、私も信用していないもの。応接室にヴォルフ様と入ると、ソファに腰かけてお茶を飲んでいた兄とお義姉様が立ち上がった。ヴォルフ様は手で制して座るよう促す。向かい側の席に腰を下ろすとティオがお茶を淹れてくれた。

「それで、どうするつもりだ？」

挨拶もそこそこにヴォルフ様が切り出した。兄相手では形式的な挨拶も不要つてことね。兄は挨拶しようとしていたところを遮られて渋い顔をしたけれど、ヴォルフ様には逆らえない。大人しく今後の計画を説明し始めたものの……

「話が長くて要領を得ないな。もっとわかりやすく説明しろ」

早々にヴォルフ様に指摘されてしまった。でもこれに関しては兄が悪いわ。やたら勿体ぶつた言い方で何を言いたいのか私も理解出来なかったもの。この人、計画の内容をちゃんと理解しているのかしら。兄が顔を赤くし、汗を拭きながら必死に話をまとめて説明し直した。

「話にならない」

ヴォルフ様の答えは簡潔だった。でも仕方がないわ。計画の目標もそれに至るための準備も何もかもが『これから詳しく詰める』ばかりで中身がなかったのだから。こんなの学生のレポートよりも薄くて現実味がないもの。

「しかし、侯爵様……！」

「俺が望むのは現実的に達成可能で、確実に利が見込まれる計画だ。絵空事に興味はない」

「そ、そんな言い方はないでしょう!? これでも一生懸命考えたものですよ!!」

兄が唾を飛ばさんばかりに声を上げた。もしかして兄の能力はこの程度しかないの？ だったら騙されたのも納得なのだけど、残念すぎるわ……

「考えただけでは意味がないと言っているのだ。俺が求めているのはガウス家の負債を確実に減らし、少なくとも五年後には利益を出せるような計画だ。このやり方では十年経っても利など得られない」

ヴォルフ様は容赦なかったけれど、私でも兄の計画の薄っぺらさは理解出来た。これでは助けようと思っても手が出せないわ。だって成功するとは思えないもの。

「そんな……」

「失敗するとわかっているものに投資する気はない」

私が嫁いだことに胡坐をかいても無駄なことよね。そんな無駄な優しさはヴォルフ様にはないわよ。

「これでは貴殿が爵位を継ぐのは不安でしかないな」

「な、何を！ 我が家の嫡男は私です。私以外に継ぐ者など……」

兄は訳がわからないといった風にヴォルフ様を見上げた。元から察しがいい方ではないけれど、両親の確執やカーリーナに子が出来たことは知らないのかしら？ 私は話していないし、父が……いえ、あの人が自分の都合の悪いことを話すとは思えないわね。

「ガウス家の後継は貴殿である必要はないということだ」

「ま、まさか、フィリーネの子が……」

「フィリーネだけとは限らん。イルーゼが産んだ子でも問題はない」

「な！」

本当に想定していなかったことに驚いたわ。あんな詐欺に騙されたら普通は廃嫡、最悪勘当されて追放なのに。男子が自分だけだからと、そんな可能性は少しも考えていなかったのね。

「そ、それは乗っ取りではありませんか！」

「嫁いだ娘の二人目三人目の子が実家の後継になるのは珍しくない。より優位に立つために格上の家に嫁いだ娘の子を嫡子にする家もあるくらいだ」

そうね、兄よりもゾルガー家の血を引く私の次男の方が立場が強く発言力も大きい。父は隠居するには早いし、私の子の成長を待つ時間もある。貴族ならいかに利を多く得るかを考えるのは当然なもの。

「ふっ、ふざけないでください!! そのようなこと、許されるはずがない!!」

「決めるのはガウス伯爵と王だ。前にも言ったが俺はガウス家に興味はない。このまま爵位返上になろうと構わん。イルーゼが望むなら王から取り戻して子に渡すくらい造作もないからな」

「な……!! ゾルガー侯爵といえどそのような暴言、受け入れかねます。失礼する!!」

そう言う兄はさっさと腰を上げて行ってしまった。お義姉様が慌てて立ち上がる。

「申し訳ございません、侯爵様。失礼しますわ。イルーゼ様……」

「謝るのはこちらの方ですわ。兄が申し訳ありません。また後日、ゆっくりいらしてください」

私が答えるとお義姉様は眉を下げながら笑みを浮かべて兄を追いかけていった。交渉決裂ね、ど

うしようもないわ。

「ヴォルフ様、申し訳ございませんでした」

「お前のせいではない」

「ありがとうございます」

「ガウス家はこれから生まれる子に継がせる方がいいかもしれないな」

「そう、ですね」

あの様子では兄を再教育しても期待出来そうにないわね。だったら姉かカリナの子を後継として育てた方がずっとマシかもしれない。それでもダメなら私の子かしら。

「どうにもならなければお前の子を後継にする」

やっぱりそうなるわね。ガウス家で育てても父や兄の複製品になつては意味がないもの。それくらいならこの家でしっかり教育した方がよさそう。お義姉様はともかく兄には任せられないわ。

兄夫婦が来た翌日、国王陛下がリシエル様の件を公にした。川に落ちて行方不明になっていること、もし発見した者がいたら速やかに騎士団か町や村の有力者に報告すること、一月経っても現れなかったら死亡と見なすとも。こんな風に王家が公表するのは珍しいけれど、身を隠せば王女の身分を失ってしまうから効果はありそうに思えた。



それから十日が経った今日はエルマ様とリーゼ様を招いてのお茶会。お二人とは婚姻式以来で、エルマ様の婚姻式は二月後に迫っている。彼女が婚姻したら一層気軽に会えなくなってしまうから、今日はたくさん話をしようと思っていたのだけ……

「エルマ様、どうなさいましたの？　なんだかお疲れのようですが……」

いつも凛としたエルマ様の表情に陰りを感じた。リーゼ様も同じように感じているのか心配そうな視線を向けている。

「何か心配事が？　私たちでよければ力になりますわ」

「……ありがとうございます。実は……」

暫くためらっていたエルマ様だったけれど、憂いのこもった息を吐いた後、その理由を話してくれた。

「ええっ？　お姉様が離婚？」

「ええ。半月ほど前から家に戻っていますの」

エルマ様の憂いの元は姉のミリセント様だった。後継の座を嫌がって、既成事実を作って逃げるように嫁いだミリセント様。根回しもなく結んだ縁は婚家にとっても不意だったようで、結婚生活は居心地のいいものではなかったらしい。実家よりも格下の伯爵家での生活と周囲の無理解にミ



リセント様はこんなはずじゃなかったと夫を責め、不満しか言わない妻に愛想を尽かした夫は愛人に逃げた。三年経つても子が出来ず、愛人を第二夫人として迎える話が持ち上がり、ミリセント様は怒り狂って婚家を出たという。

ベルトラム侯爵は出戻りを許さなかったけれど、夫人が娘可愛さに屋敷に入れてしまった。それがエルマ様の苦悩の始まりだった。ミリセント様はあろうことかギレッセン様に擦り寄ったのだ。婚姻が近づいて彼がベルトラム侯爵家に移り住んでいたのもよくなかった。穏やかな性格の彼はミリセント様を強く拒絶出来ず、母親も傷心中だから暫く大目に見てほしいと言っているのだとか。

「さすがに節操がなさすぎますわ」

「そうですね。家と婚約者を捨てておきながら今更戻りたいだなんて……」

私もリーゼ様も開いた口が塞がらなかったわ。何をお考えなのかしら？

「御父君は何も仰いませんの？」

そもそもよく侯爵がお許しになったわね。勘当同然ではなかったの？

「父はそんなことで一々騒ぐなど……でも母は姉に同情的で。元々あの二人は母娘というよりも姉妹のような感じでしたから」

「騒ぐなって……お姉様を追い出すのが筋でしょうに」

「ええ、そんなことをされたら私も家を出ますわ。そんな姉も婚約者もいませんもの」

いくら仲がいいとはいえ、さすがにそれはないでしょう。エルマ様がどんな思いで後継としての役目を果たそうとしているのかわかっていたら姉の肩など持てないわよ。

「それで、ギレッセン様はなんと？」

「彼は何も。十年以上姉の婚約者だった方です。二人の仲は悪くありませんでしたし、私よりも付き合いが長いのでどうお考えなのか……」

ちよつと待って。ギレッセン様の対応も酷くない？ エルマ様は複雑な気持ちを呑み込みながらも歩み寄ろうとしていたのに。

「エルマ様、お気をしつかり。今はエルマ様が後継者です。ミリセント様は逃げ出された方。今更戻ろうとしても世間が許しませんわ」

「そうですね。こんなことがまかり通ればベルトラム家は筋を通さない家だと後ろ指を指されてしまいますわ。国を導く立場の侯爵様がそのような愚を犯すとは思えません」

私たちの励ましにエルマ様が瞳を揺らして淡い笑みを浮かべたけれど……

「エルマ様、もしかしてギレッセン様のことを……」

「イ、イルーゼ様！」

青褪^{あおぞ}めて見えたエルマ様の頬にさつと赤みが増した。時折ギレッセン様の話になると表情が強張っていたから苦手なのかと思っていたのだけど、その逆だったのね。よくよく話を聞くと、エルマ様は昔から優しく接してくれたギレッセン様を慕っていたのだとか。

「私たちはエルマ様の味方です。なんでもご相談なさって」

「ええ、エルマ様のためなら協力は惜しみませんわ」

「あ、ありがとうございます、お二人とも……」

少し元気が出てきたのか、さつきよりもはつきりした笑みを浮かべてくれたけれど、それでもエルマ様の表情がいつものそれに返ることはなかった。こうしている間も屋敷ではミリセント様がギレッセン様に擦り寄っているのかもしれない。

エルマ様が次の予定があるからと先に帰られた後も、応接室は重い空気に包まれていた。リーゼ様も珍しく眉間に深い皺^{しわ}を刻んでいる。

「ベルトラム家はどうなっているのかしら？」

「私も詳しいことは……でも腹立たしいですわ。ミリセント様は楽な方に流れた方じゃありませんか。そのせいでエルマ様がどれほど苦勞なされたことか……」

思わず漏れた言葉にリーゼ様の怒りが滲^{にじ}んでいた。卒業二年前に急に嫡子にされたエルマ様。それまでの淑女科の勉強以外にも当主としての勉強も追加されて、学園で五年かけて学ぶことを二年で成し遂げるためにどれほど苦勞なさっていたか。それもギレッセン様への恋心があったから頑張れたのね。そんなエルマ様を蔑^{あいつ}ろにするなんて……許せないわ。

「でも……下手に手を出せませんわね」

「ええ。エルマ様もギレッセン様を想っていらつしやるとなると……余計なことをして拗^{こじ}れては目も当てられませんし……」

私もリーゼ様も恋愛の経験がないから助言のしようもないわ。ミリセント様についても詳しく存じ上げないし……互いに重いため息をつくばかりでこれといった妙案は浮かんでこなかった。

「そう言えばイルーゼ様、侯爵様とはいかがですかの？」

「……そう、ですわね。ヴォルフ様は何かと氣遣つてくださいますし、実家よりもずっと快適ですわ」

「よかったですわ。世間の噂もあるから心配でしたの」

リーゼ様がホッとした表情を浮かべた。心配をおかけしていたのね。ヴォルフ様は感情のない冷酷な方だと世間では言われているから。

「……ねえ、リーゼ様。恋ってどんなものなのかしらね」

「恋、ですか……」

私は恋をしたことがない。結婚は政略だからそういう感情は持たないようにしていたし、ハリマン様は好みじゃなかったから惹かれることもなかった。

「私も、ですわね。ローレンツ様は兄のような存在ですから」

「リーゼ様の場合はライバルでもありますものね」

「ふふ、最近はそんな感じですよ」

リーゼ様は苦笑しながらそう答えたけれど、ローレンツ様はリーゼ様を想っているように見える。リーゼ様に向ける視線は私たちに向けるそれとは違うし、時には私たちに渋い表情を見せる。あれは嫉妬^{しつと}ではないかしら……

「よくわからないわね、恋って」

「ふふ、やろうとして出来るものではなさそうですわ。でも、イルーゼ様は侯爵様に恋をなさつてもよろしいのでは？」

「え？」

そんな風に言われるとは思わなくて驚いたわ。ヴォルフ様に、恋？

「だって、もう夫婦ですもの。侯爵様は恐ろしく見えますけれどイルーゼ様にはそんなことはないのでしょうか？」

「ええ、まあ……」

怖い、とは感じないわ。根は優しい人だと思うし。

「結婚してから互いを知り恋に落ちる夫婦もいるそうですわ。侯爵様は信用出来る方のようにですし、夫婦になった今なら安心して恋が出来るではありませんか？」

そういう考えもあるのね。確かにヴォルフ様は凛々^{りんりゃ}しくて男性らしくて素敵^{そてき}だわ。夫人たちが熱の籠^{こも}った目で見るのもわかるもの。愛を期待すると言われたけれど……私が好きになるのはいいのかしら？

「……どんな状態になったら、恋をしたと言えるのかしら？」

「まあ、それは人それぞれなのではありませんか？ ふふ、イルーゼ様、そのご様子なら既に恋しているのかもしれないわね」

「……私が？」

そんな風に思ったことはなかったわ。だってこの結婚は政略で契約だから。

「そんなことを尋ねられるということは既に気になっていらっしやるのではありませんか？ その方が他の女性から興味を持たれて嫌だと感じたなら、もう恋の入口に立っているそうですわ」

先日読んだ物語にそう書いてありました、とリーゼ様が微笑んだ。ヴォルフ様に恋をするなんて考えもしなかったけれど……いいのかしら？ そうなったらどんなに素敵かしらと思う自分がいた。でも、それはヴォルフ様との約束を違えることにならないかしら？ そう気付いたら急に気持ち冷えた気がした。せつかくいい関係を築けているのに、この気持ちを知られたら壊れてしまうかもしれない……

やっぱりダメだわ。信頼を失うなんて耐えられない。余計な感情を持たなくてもヴォルフ様の妻は私で、お子を産むのも私だもの。それで十分よね。これ以上考えるのは……危険だわ。



エルマ様たちとのお茶会から十日ほど後、お義姉様から手紙が届いた。エルマ様も心配だけどこちらも頭の痛い内容で、兄が毎日のようにどこかに出かけて夜遅くまで帰ってこないといった。ヴォルフ様に話をするに既に把握されていて、兄が通っているのは商人らが集まる倶楽部で、事業の損失を埋めるためにあちこちに声をかけているのだという。

「そんなに無節操に声をかけて、大丈夫なのでしょうか……」

あっさり騙された兄だから不安しかなかった。焦っているのでしょうか、これ以上損失を出されたら実家が破産してしまうわ。お義姉様のためにもそれは避けたいのに。

「あれが誰と何をしているかは監視している」

さすがはヴォルフ様ね。その言葉にホッとしたわ。でも……ヴォルフ様から聞いた話は全く安心出来るものではなかった。また怪しい商人の話に乗り、騙されつつあるという。

「そうですか。やはり兄は……」

「廃嫡する」

私が口にする前にその先を言われてしまったわ。言葉にするのを躊躇ったことに気付かれてしまったかしら。こんな弱気な態度ではゾルガー夫人として相応しくないと思われたかもしれない。もつと強くならないと……

「無理はするな。言い難いことは俺に言わせればいい」

「ですが……」

「俺には痛む心がないから問題ない。今回は家族の話だ。決断し難いことは理解している」
もしかして私のためにそんな風に言ってくださっているのかしら。

「お前は度胸もあつて気も強いが、まだ世に出たばかりだ。それに汚い世界を知らん。いきなり俺と同じことが出来るとは思っていない。フレディもそうだ。荷が重いと思うことは俺にやらせればいい」

その言葉に目の奥が熱くなった。大丈夫だと、自分のペースでいいと言われているようで安堵が胸に広がる。やっぱりこの人に感情がないなんて信じられないわ。

「ありがとうございます。きつと追いつきますから、それまではよろしくお願いします」

「気負わなくていいと言っただろう。無理に汚れる必要もない」

それはヴォルフ様が汚れているという意味なのかしら？ そんなことはないわ。混乱を招かないよう秘密裏に手を回すのは社会の秩序を守るためにも必要な行為。実家だってこのまま破産すれば多くの取引先に損害を与えてしまうし、使用人や民にかけなくてもいい苦勞をかけてしまう。それを回避するために誰にも知られないよう手を回すことを、汚れるなんて言葉で片付けたくない。綺麗ごとだけでは世の中は回らないもの。

それからヴォルフ様は兄の廃嫡に向けて動き出して、私はお義姉様を呼んでその旨を話した。お義姉様も前回の訪問で覚悟は出来ていたらしく、寂しそうな笑顔で了承してくださった。あんな兄でも夫婦として二人の間には私にはわからない何かがあるのでしょうか。

それから数日後、ヴォルフ様は父を呼び出した。少し会わない間に一層老け込んだわね。兄がまた騙されそうになって実家の状況がよくないのでしょうか。

「伯爵、長男は廃嫡しろ」

「……それは、決定事項でございますか」

「そうだ。今回の被害は甚大だ。なのに実効性のある対策を考えられなかっただけでなく、また怪しい商人に騙されそうになっている。被害が出る前に片を付けろ」

ヴォルフ様が淡々と告げる言葉を父は顔を青くして聞いていたけれど、最後には大きく肩を落として俯いてしまった。手が小さく震えている。兄には愛情があったのかしら。

「わ、私が責任を取って爵位を……」

「貴殿にはこれからも当主としての務めを果たしてもらう」

「……かしこまり、ました……」

絞り出すように父が答えた。父もわかっているのでしょうね、兄では無理だと。父も出来た当主ではなかったけれど、ワイン事業は堅調であんな怪しい商会と手を結ぶようなことはなかったわ。当主としては父の方がマシだった。それに現時点では爵位を返上するほどではないのよね。損害は大きくてもまだ建て直しが可能だとヴォルフ様はお考えだから。

「しかし……あれが納得するか……」

確かにあの兄に納得させるのは大変でしょうね。いえ、何を言っても納得しなさそう。

「納得しなければ、これを使い」

そう言うヴォルフ様が小瓶を懐から取り出してテーブルに置いた。手のひらに隠れてしまうほどの大きさの薄灰色のガラスで出来たそれは、静かにその存在を主張していた。

「飲めば高熱が出て、熱が下がったあとは手足に麻痺が残る」

「これ、が……」

子どもがかかる病気の一つに、大人になってからかかると重症化して麻痺が残るものがある。それと変わらない症状と経過になる毒があると、貴族なら一度は耳にしたことがあるはず。私は実物を見るのは初めてだけど、父もそのようね。

「どうしても言うならこれを飲ませろ。手足が不自由になれば廃嫡するしかなくなる」

父は呆然とガラス瓶を見つめていた。あんな風に育てた責任を取って飲ませると仰るのね。

「使わないなら返してもらおう。この葉は王家が管理しているものだ」

「……かしこまりました」

重苦しい空気の中、父はそう答えて瓶を手にした。屋敷を後にする父の背は丸く、随分小さくなったように見えた。そこには私が恐れていた昔の面影おもかげは見つからなかった。

それから十日後、兄が高熱を出して寝込んだとお義姉様から連絡があった。父の説得は功を成さなかったのね。こうなることがわかっていたし納得もしていたけれど、いざそうなると思がざわついたのは、僅かに残っていた家族の情のせいだったのかもしれない。

一方、そうしている間に姉の方にも動きがあった。兄が熱を出したとの連絡があった翌日、姉から私宛に手紙が届いたのだ。その中身を読んだ私はすぐにヴォルフ様の執務室に向かった。

「どうした？」

「姉の元にクラウス様から手紙が届いたそうです。姉からの手紙にそのように……」

そう言いながら姉の手紙を渡すと、ヴォルフ様は手に取って文字を追った。そこにはクラウス様から、会いたい、腹の子は俺の子か？ あれからずっと気にしていたなどの文字が並んでいた。

「そう、か。一度会いに行くか？」

「よろしいのですか？」

「ああ。姉の様子を確かめたいと思っていたところだ。都合のいい日を知らせると返せ」

「わかりましたわ」

ヴォルフ様に言われた通りに手紙を送ると翌日返事が届いた。いつでもいいというのでヴォルフ様が五日後を指定した。

姉の元に向かうその日、私は飾りが少ない濃緑のシンプルなデイドレスまじを纏い、宝飾品も控えて地味な格好に徹した。妊娠中の姉を刺激したくなかったから。

「お待たせしました」

今日の供のザーラと共に玄関ホールに向かうと、ティオとアベル、その後ろに護衛騎士が立っていたけれど……

「ティオ、ヴォルフ様は？」

肝心のヴォルフ様の姿がないわ。一緒に行くとお仰おっしゃっていたわよね？

「ここだ、イルーゼ」

「え？」

声がした方に視線を向けて、思わず息を呑んだ。そこには茶のかつらを持ち上げて綺麗に撫でつけられた黒髪を晒さらすヴォルフ様がいた。ゾルガー家の騎士服を纏まとっている。変装していくとは思わなかったから驚いたわ。

「俺がいると本音を出さないかもしれないからな」

かつらを被り直すと長めの前髪で険しい目元や鮮やかな木々のような色の瞳が隠れ、少し背を丸めた姿はもつさりとした感じの平凡な騎士に見えた。同行する騎士は皆背が高いから違和感なく溶

け込んでいるわ。

「どうした？」

「いえ……別人にしか見えなくて……」

大抵のことは卒なくこなされる方だと思っていたけれど、変装までお上手だとは思わなかった。言われなかったら気付かなかったわ。

「今から俺はただの騎士だ。むやみに話しかけるなよ」

「は、はい」

確かに侯爵夫人が護衛騎士に声をかけることは基本ない。でも、そう言われても気になってしまいうわ。アベルたちと馬車に乗り、ヴォルフ様も含めたゾルガー家の騎士が馬車を守るように囲った。ヴォルフ様は車窓のすぐ側にぴたりと添って馬に揺られているけれど、やっぱり別人にしか見えないうわ。

「旦那様はあの姿で時々街や領地に行かれるのです。慣れていらつしやいますから大丈夫ですよ」

車窓からヴォルフ様を眺めているとアベルがこっそり教えてくれた。それってお忍びで視察に行くためよね。この姿の時はグンターと名乗っていることも教えてくれたけれど、あの溢れんばかりの威圧感と存在感はどこに行ったの？

「旦那様は優秀でお強く、とても多才な方です。あの方に初めてお会いした時の衝撃は昨日のことのように覚えています」

いつだったか、茶の瞳を輝かせてアベルがその日について語ってくれたことがあったわ。伯爵家

の三男に生まれた彼は継ぐ爵位もなく騎士を目指していたけれど、ヴォルフ様に出会って人生が変わったと言っていた。騎士を辞退してゾルガー家の門を叩き、ヴォルフ様の従者にしてほしいと願い出て、四年前によくその地位を手に入れたと。ゾルガー家の使用人の忠誠心が強く結束が固いのはヴォルフ様に心酔している者が多いからなのでしょうね。

姉が住むのは王都の西側にある裕福な平民たちが居を構える一角。貴族街ほどの華々しさはないけれどお金をかけているのがわかる、中級程度の屋敷が並んでいる。その中でも特にこぢんまりとしていて木々が多く植えられている屋敷の前に止まった。護衛騎士の一人が門を守る騎士に声をかけると、鈍い音を立てて門が開いた。そのまま馬車で玄関まで進む。

玄関でアベルの手を借りて馬車から降りた。騎士に前後を守られて中に進む。ヴォルフ様は私のすぐ後ろにいるらしい。久しぶりに会う姉。最後に会ったのは姉が領地に送られる直前だった。あれから五か月ほど経ったかしら。私はゾルガー侯爵夫人になり、姉は実姉ではなくいとこだったと知った。私たちの立場が変わってしまったせいか、今までにない緊張感を覚えた。

案内されたのは応接室だった。部屋に入ると姉は既に二人掛けのソファに座っていた。玄関に出迎えなかったから待たされるかとも思っていたけれど、お腹が目立ってきているから動けなかったのね。身近に妊婦がいたことがないから勝手がわからないわ。向かいの席に着くとこの使用人がお茶の準備を始め、ザーラとヴォルフ様、そして護衛騎士一人が室内に留まった。ヴォルフ様は私の後ろ側に立っているみたいだけど姉は気付いていないようだ。

「お元氣そうで何よりですわ」